

新書

太閤記 二

吉川英治



新書太閤記

老川采菴

太 閤 記 (全八卷)

第 二 卷



昭和32年9月5日 初版発行

昭和48年5月31日 第57版発行

著 者	吉 川 英 治
発 行 者	吉 川 文 子
印 刷 者	守 安 巖
印 刷 所	東京印刷株式会社
発 行 所	株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2
電 話 03 (943) 3431~3
振 替 口 座 東 京 92448

落丁、乱丁本は本社で御取替え致します

© by Eiji Yoshikawa 1957 TOKYO Printed in Japan

定価は帯に表示してあります

0093—00308—9216

目

次

若き家康	三
鐵漿將軍	二〇
望　　蜀	一六
兵糧陣	一四
天機と人	一三
出　　陣	一〇
この一期	七
田樂狭間	六
白雨・黒風	五
虹	一〇〇
夕顔の門	一〇一
敵國巡遊記	一一四

菊便り	二三
聶の君	二三
水掛祝い	二四
背和前戦	二五
春の客	二七一
洲股	二八二
龍呼	二九五
大器の相	二〇九
山川皆兵	二六
一擒一縦	二四
竹中半兵衛	二六
病孫子	二四三

山 中 人……………三三

桃 源……………二七

竿頭一瓢……………二三

母に侍す……………二六

隣交遠計……………二〇

密 客……………一八

桔梗咲く……………一五

春 風 行……………三九

（桶狹間戰圖）……………七

（尾濃畿内要圖）……………一七

新書
太閤
記
第二卷

題 裝

字 幀

吉 杉

川 山

英

治 寧

若き家康

駿河衆は、この地を駿府とは稱はない。府中と稱んでいる。

海道一の府をもつて任じているからであつた。上は義元から今川の一族門葉をはじめ、町人に至るまでが、（ここは大國の都府）

という自尊を持つていた。

お城もお城といわず、御館或いはただ館という。總てが公卿風であり、下は京好みだつた。

尾州の清州、那古屋あたりとは、街の色や往來の風俗からしてまるで違つていた。道行く者の足の早さ、眼のつかいよう、言語の調子からして違うのである。府中は、おつとりしていた、衣服の華美の程度で階級が知れた、扇で唇をかくして氣取つて歩いた。音曲が旺んだつた。連歌師がたくさんいた。——どの顔もどの顔も、わが世の春を謳歌した藤原氏の一頃のように、長閑けく見えた。

晴れば、富士山が見え、霞めば、清見寺の松原越

しに、波靜かな海が見えた。

自然に恵まれていた。

兵馬は強大だつた。

三河の松平氏も、ここの屬國に等しかつた。

「松平家の血をうけ繼いだわしの身は此處に。——亡びかけた城をどうにか支えてくれている臣下は岡崎に……國はあれど主従は別に」

元康は、心のうちで、擬と、自分でつぶやきを噛みしめていた。

この氣持——口に出さないこの思いは——明けても暮れても胸を往來していた。

「不惑な家臣共……」

と。

時にはまた、身を顧りみて、

「よく生きて在つた」

と、思う。

徳川藏人元康——いうまでもなく後の徳川家康——

は今年十八歳だつた。

もう子どもがある。

義元の一族、關口親永の娘を、義元の計らいで娶つたのである。それが十五歳であつた。元服も同時にし

た。

子は、この春生れたので、まだ半年ほどにしかならない。

彼が机をおいている居室にまで、時折、泣く兒の聲が聞えて來た。産後の日經ちの悪い妻はまだ産室にいた。妻は兒を産室から離さなかつた。嬰兒の聲は耳につきやすい、まして十八歳で父となつた彼には、初めて聞く骨肉の聲でもあつた。

けれど元康は、めつたに奥へは立たなかつた。よく人のいう子の可愛さというような氣持は、分らなかつた。自分の心のうちを搜してみても、どうもそういう愛情は、今の所、乏しいというより見當らなかつた。こうした自分が父である事は、子や妻へ濟まない氣がした。

「……不惑な者共」

と、思うたびに、惻々^{はげ}と胸のつまる心地がするのには、むしろ骨肉でなくて、岡崎の城に、年來、貧窮と屈辱に耐えている家臣たちの身であつた。

強いて、子と思えば、

「あれも今に、わしのような困苦と、辛い人の世の旅をし出すのか」

と、傷ましい考えの方が先立つてしまふのであつた。竹千代^{たけちよ}とよばれた幼少に父とわかれ、六歳で敵國の質子となつてから、今日までの流轉の艱難^{かんなん}を振り返ると——生れ出たわが子へも、人生の悲雨慘風を、思い遣らずにいられなかつた。

——だが今は。

表面、人目には、彼の家庭も、府中に榮える今川衆の一家として、同様な身分と幸福らしい館作りには圍まれていた。

「はて。何の物音？」

元康は、ふと、室を出て、縁に立つた。

誰か、築土^{つぎど}に絡んでゐる晝顔の蔓を、外から曳いたものであらう。

薦^{つた}、晝顔の蔓は、築土から庭木へまで伸びている。

切れた蔓の反動で、梢が微かにゆれていた。

「誰だ？」

元康は、縁に立つた儘、もいちど云つてみた。

悪戯なら、逃げもするだらう。だが、登言^{あきこ}もしなかつた。

草履^{ぞうり}をはいて、彼は築土の裏口をあけて出た。——と、そこに、待ち設けていたように、笈^{あき}と杖を置いて、

一人の男が手をつかえていた。

「甚七か」

「お久しゆうござります」

四年前。元康が、義元のゆるしを漸く得て、先祖の墓参にと、岡崎へ歸つた時、その途中から姿を見せなくなつたきりの家來——鵜殿甚七なのだ。

笈や杖や、變りはてた甚七の姿を見て、

「山伏となつてか」

と、元康の眼は、有わるようであつた。

「はい。諸國を歩くには、かような身なりが、至極便宜でござります故」

「いつ戻つたか。——府中へは」

「たつた今でござります。御門からと存じましたが、また直ぐ、他國へ立つ體、お身内たりとも、知れぬに越した事はないと存じまして」

「……はや、四年になるのう」

「はい」

「諸國から、その都度、細々とそちの見聞は書面で受け取つておるが、美濃路へはいつてからは便りがないので——實は案じていた折じや」

「美濃の内亂に出會いましたので、關所固めや、駅傳

の調べが一頃やかましくて」

「あの折、美濃に居合わせておつたか。よい時に美濃にいたの」

「そのまま、一年の餘、稻葉山の城下に潜んで、成行を見ておりましたが、御承知のように、道三山城は相果て、義龍が美濃一圓を治めて、一先ず落着いた様子に、京へ上り、越前へ出、北國路を一巡して、先頃、尾州まで立ち戻つて參りました」

「清洲へ足を入れたか」

「密かに……」

「聞きたい。さし當つて、美濃の將來は、府中におつても、見とおしがつく。——が、容易に推測れぬのが、織田の現状じや」

「書面にでも致して、夜中にでもそツと、お届けいたしましょうか」

「いや、書中では」

元康は、築土の裏口を振り向いたが、また何か、思ひ直しているふうであつた。

甚七は、彼の眼であり、また、天下を知る耳であつた。

六歳の頃から、織田家へ、また今川家へと、彼の少

年時代は、流浪と、敵國の中に送り、その體は、人質として、自由を許されずに過ぎて來た。今日もまだ、その束縛は解かれていない。

眼も、耳も、知性も、人質はふさがれていた。彼自身が努めなければ、誰も、叱りも勵ましもしなかった。——が、結果は反對に、彼がいちばん旺んな志慾の持主となつたのは、幼少時から、餘りにもその育ち盛りの眼や耳や行動や知性を、他から抑制され過ぎたためでもあつた。

四年も前に、家人の鶉殿甚七を、追放のていにして、諸國へ放ち、居ながら諸州の動靜を知ろうとしたなど——その大きな他日の慾望の芽を、もうそろそろ現わしていた一例とも云えよう。

「さての。……ここでは人眼につくし、邸では家人共が不審ろうし……。そうだ、甚七、あれへ參ろう」

元康は、指さして、先へ大股に歩き出した。

彼の今住んでいる質子邸は、府中の御館を繞る大路小路のうちでも、最も靜かな少將之宮町の一角にあつた。

その築土裏から少し行くと、安倍河原へ出る。

元康がまだ家來の背に負われて歩いた竹千代の幼少

から、外へ遊びにといへば、この河原へ來たものであつた。悠久と流れている水のすがたにも變りはないし、眺めもいつも同じ河原だつたが、元康には、何かと思ひ出が深かつた。

「甚七。その小舟を解け」

元康は、指さして、汀からすぐそれへ乗つた。

釣舟か、築舟であろう。甚七が棹で突くと、笹の葉のように、小舟は瀬から流れへ出た。

「この邊でよい」

主従は、小舟の中で、初めて人眼から解かれたこちで、語らい合つた。

元康は、甚七が多年、諸國を経巡つて得た知識を、わずか一舟の席で半刻の間に得てしまつた。

そして甚七が習得して來たものよりは、遙か、大きなものを、胸奥へ收藏した。

「そうか。……ここ數年、織田家が信秀の代とちごうて、餘り他國へ侵攻して出ぬのは、専ら、内治を整えておつたためだの」

「二心ある者は、系類であると、譜代の臣であるのを問わず、思いきつて、討つ者は討ち、追う者は追ひ、殆んど清洲から清掃されたようであります」

「その信長を、一頃は、稀な我儘者よ、阿呆の殿よと、今川家などに於いても、よう笑いなしに取沙汰があつたが」

「以てのほかです。阿呆どころではありませぬ」

「ふむ。——わしも油斷のならぬ噂とは思つていたが、今猶、それが先に頭にあるので、御館などでも、織田といえ、おかしそうに、敵ではないと極めておいでになる」

「數年前とは、尾張衆の士氣がまるで違つております」

「よい家來には」

「平手中務は相果てましたが、柴田修理權六、林佐渡通勝、池田勝三郎信輝、佐久間大學、森可成など、なお人物は少なしとしません。わけて近頃、出色の男に、木下藤吉郎ともうす者……至つて小身者の由ですが、何かにつけ、城下の領民たちの口端によつて名のある男などおりまする」

「領民は。——信長への、領民の氣もちは」

「恐いのはそれです。何國の大將でも、治民には心を傾けております故、領民が國主に服従し、國主を崇めておることは一様でありますなれど……尾張ではそこ

がちと違つて感ぜられました」

「どう違ふ」

「鶴殿甚七は、ちよつと、考えていたが、端的にそれを、云い現わせないように、

「かくべつ、どうと申して、變つた治策も見えませんが、とにかく領民が、信長を中心に、明日を憂いておりません。彼の君在ればと安心してゐる様が見えます。尾張の弱小なことも、國主の貧乏な點も、よく辨えていながらです。他の大國の領民のように、戦亂や明日の生活に脅えておらぬのが、不思議に見える位です」

「……ム、ム。なぜかな」

「信長自身が、そうした氣性だからでしょう。曇らば曇れ、照る日もある。今はこうだが、未來はこうぞと、指さす的へ、人心を集めております。というて、陰氣にいじけてゐる領民ではありません。例えば、祭の行事などにいたしても……」

と、云いかけて、何思ひ出したか、甚七は語らぬうちに、苦笑しました。

「その祭について、實は、失敗はなしておりますので——」

と、甚七は、清洲城下の祭の夜、巷の中に、ゆくり

なく信長主従の微行を見かけ、むらむらと奇功に驅られたまま、信長を刺そうとして、かえつて捕えられて、憂目に會つた事を、

「……どうもこれは、餘り自慢にもならぬ事です」と、話し終つて、頭を掻いた。

元康は、笑いもせず、

「そちらしくもない事をする」

と、輕率^{けいそ}を誡めた。

「以後は」

と、甚七は、頭を下げながら、餘事までしやべりすぎた事を後悔した。

そして、ひそかに胸のうちで、ことし二十四歳の信長と、十八歳になる元康とを、較べる氣もなく思い較べていた。

はるかに、元康のほうが、信長よりは大人の感じだつた。稚氣^{わかしき}というようなものは、元康には少しも見えなかつた。

信長も幼少から、荊^{けいし}の中に育つて來た。元康も苦勞の中に人となつた。けれど、六歳から他人^{ひと}手に渡されて——それも敵國へ質子^{ちし}として——人の世の冷たさ、酷さを、骨の中まで味わつて來た元康の苦勞と信長の

それとは、到底、較べるものにはならなかつた。

六歳で、國を離れ、織田家の嫡人^{ちやくじん}となつて、八歳再び駿河の質子となり、漸く十五歳になつて、今川義元からも人あつかいをうけ、彼が、

（祖先の墳墓をも拂い、亡父の法事もしたければ——）という願いが許されて、何年ぶりかで岡崎へ歸國した時に、こういう語り草さえ残つてゐる。

彼が、祖先の地、岡崎へ歸つてみると、自分の城の本丸には、今川家の山田新右衛門^{やまだしんえもん}などという被官が、城代として居すわつてゐるのだつた。

殆んど、今川家の隸屬^{れいぞく}として、辛くも息をつないでいる三河譜代の家臣たちも、何年ぶりかで歸國する若殿を迎え、うれしさやら口惜しさやらで、

（いかにとは云え、本丸に今川家の家臣を置いて）と、何とか退いてもらう交渉をしようとした所、それを聞いた竹千代は、

（いや、わしは年若じやが、城代は御老人。諸事古老のおさしずもうけねばならぬ。本丸はそのままにおくように——）

と云つて、滯留中、二の丸にいて、父の法事なども營んで済ましたという。

この事は、義元も後で聞いて、

(年に似げなく、分別の篤い事である)

と、すこし不惑そうにつぶやいたそうである。

だが、やはりその時の事で、も一つ、これは義元も知らない事があつた。

竹千代の父廣忠の代から仕えている者で、鳥居伊賀守忠吉という老人がいた。年ももう八十を越えた三河武士であつたが、竹千代が岡崎逗留の一夜、そつと、梓の腰を運んで目通りを乞い、そして幼君へ向つて沁沁というには。

(爺の身も、ここ十年の餘、今川家の一役人と異らず、賦税の取り立てを役目として、牛馬のような勤めをいたしておりますが、年來、忍び忍び心がけて、お庫の内には、爺が御被官の眼をぬすんで蓄えておいた糧米や金銭がござりますぞ。いつこのお城に孤立してお籠りなされようと、彈藥や鐵も戦うほどは匿してもありますぞ……ゆめ、お心ばそく思召されな。大志をお失いなされますなよ)

竹千代は、それを聞いて、爺よ、とばかり忠吉の手を取つて泣き、忠吉もしばし泣き暮れたという事であつた。

我慢。

三河武士の脊ばねは、我慢の鍛錬で組み上つていた。君臣共に、生涯を辛抱から出發していた。

三河武士の辛抱強い實證は、元康の初陣の折にもあらわれていた。

去年。

元康は十七歳で、初めて陣頭に立つた。

毎々、三河を脅やかしている鈴木日向守の寺部の城を攻めた時である。

勿論、今川義元のゆるしを得た上の事であるが、その時は、義元から暇をもらつて、彼が三州へ歸國していた折なので、全軍の組織も、將兵の質も、すべて純粋な三河勢をもつて戦つたのであつた。

元康は、譜代の古老や家の子郎黨をひきいて、初めて敵地へ進撃したのであるが、敵の寺部の城下まで攻め入ると、

(この度は、城下を焼き拂つて、ひとまず退軍し、また機をみて、軍をすすめるであらう)

と、所々へ放火したのみで、遽かに三河へ退いてしまつた。

初陣とあれば、誰しも、華々しい功名を心がけて、

世上の聞えにも銜氣を抱くのが青年の常なのに——何となされた事かと、後に訊ねる者があつた。すると元康は、

（寺部は敵の幹である。多くの枝葉を持つておる。その本城まで難なく攻め入られたのは、敵に思慮があつたからである。よい氣になつて長陣していたら、敵は、退口を斷つて、所々の味方となぎを取り、われらを重圍に墮してから、本相をあらわして戦い出したにちがいない。武器も兵糧も人數も微弱な三河勢では、長陣しては利なしと考へたので、今度は、城下へ放火して引き揚げた迄の事である）

と、説明した。

酒井雅樂助、石川安藝などの三河の古老共も、それを聞いて、

（たのもしき御方よ。行末いかなる大將におなり遊ばすやらん）

と、云つて、先々の奉公をたのしみに思うと共に、各々、老の身をも養ひ、留守居の岡崎も大事に守つて、ひたすら時節の來るのを、待ちぬいているのであつた。——だが、時節といつても、そうした譜代衆の多くは老年なので、元康はどな辛抱はしきれなくなつたか、

元康が寺部攻めの初陣後、今川家へ向つて、改めて、（主人元康儀も、はや御一人前とお成り遊ばしましたからには、何とぞ舊約の如く、岡崎の御被官方を引き揚げられて、城及び舊領など、元康君へお返し給ひますよう。然る上に、われわれ三河武士共も、永く今川家を盟主と仰ぎ、一層の御加勢を勵みたいと存じますれば——）

という意味の、嘆願書をさし出した。

もつとも、嘆願は、今までにも、何度となく、機會を窺つては、三河から今川家へ迫つていた事であるが、今度も、今川義元は、

（まず、もう一兩年は）

と、逸らして、背いてくれるふうもなかつた。

元康が成人したら、必らず城地を返すと、元康を質子として今川家へよこした時の固い條約だつたのである。

義元はもとより、返還する氣はなかつたろう。十數年の間に、何か三河側に落度があつたら取り上げて、完全に收めてしまふ肚だつたかと思われる。けれど長い年月、とうとうその口實となるような落度は、三河の臣にも、元康にもなかつた。三河の隱忍、自重、我